

ワインと神話

芸林 民夫

ワインと宗教

アルコール類の中で初めに出来たのは多分ビールだと思われるが、地中海辺りでは新石器時代（日本では縄文時代）からワインも飲まれていた。古代シュメール（紀元前三千年頃）ではビール造りは法律で司祭職に制限されていた。何故かという、人間はアルコール類（と言っても化学的にアルコールと分かっていなかった）を飲むと精神的に変わる事がある、がそれは「霊」に満たされる為だと考えていた。飲む時には大抵心地良いが、悪酔いした時は、飲み物に「悪霊」が入った為と信じていた。当然霊の扱いは専門家である司祭達が行うべきとなり、法律が出来たという理由。

酒類は霊的なものとして古代から東西を問わず宗教的な取り扱いを受けた。日本でもウィスキー造りの第一段階の原料のマッシュを煮る釜の煙突に悪霊が入らない様に神道のお守りである注連縄を掛ける。現在欧米ではアルコール類を「スピリッツ」(spirits)と「霊」の意味でもある単語で呼ぶ。また、ワインは特別な霊的効果のある物として神の血になぞらえている。宗教によっては神の血そのものと信じられている。例えばキリスト教の儀式の中でもワインは大きな役割があり、ローマカトリック教会のミサでのワインはキリストの血である信じられ、儀式の中心的存在である。聖書の話によると最後の晩餐でキリストはワインの入ったコップを持って「これは皆の為に流す私の血である…」と言い、弟子達に飲ませ、これからも同じ様にやるようにと命じた。

ワインが清めの血になることはユダヤ教の伝統にもある。聖書の出エジプト記によると、神の命を受けたモーセの下でエジプトを脱出しようとするヘブライア人に對して許可を出さないファラオに怒った神からの罰として、エジプト中の長男が天使によって殺される事になった。モーセの指示で、すでに殺された印としてヘブライア人（後のユダヤ人）は家の門に子羊の血を塗り、それを見た天使がその家を通り過ぎてヘブライア人の長男は殺されずに済んだ。これを記念するユダヤ人の年間行事の一つ、「過ぎ越し祭」の中でセデルと呼ばれる祝宴で、救いの子羊の血の意味でワインを飲む。またキリストの最後の晩餐はセデルの宴会と思われており、その時のワインも永遠の命の「羊の血」と呼ばれ、イエス・キリストは「神の子羊」とも呼ばれる。

ワインと古代ギリシャ

ワインが命の素といわれるのは古代ギリシャの時からであるが、特にギリシャの神々の永遠の命の素はネクタルという美酒であった。

ギリシャ神話の中でディオニシオスがワイン造りを發明するが、その秘密をイカロスという百姓に教える。イカロスはそれを作って近所の人に飲ませたが、初めて酔い、変な気持ちになった百姓達は毒を飲まれたと思い込みイカロスを殺す。イカロスの娘は彼を探しに来て死んでいるのを見て絶望のあまり自殺する。この神話の「イカロス」は他の神話ではディオニシオス神自身と思われる、ワインは彼の血であるとも考えられていた。カトリックのミサのワインが神の血であると同様にディオニシオス祭で飲むワインは神の血であると思われる。た。

またトロイア戦争でギリシャ軍を率いたアガ멤ノンの息子オレステースは、父の留守中に浮気をした母親クリテムネストラを殺して逃げた。殺人者と話をするのもタブーだったけれども彼に同情するアテネ人は彼に知らぬ振りしながらも清めの血の意味の赤ワインを飲ませてもてなした。

アテネ市でのアンゼステリア祭は言うまでもなくワインの祭であったが、その祭の色々なイベントの中にディオニシオス神のワインの發明、イカロスの死とオレス

テースへのもてなしを儀式的に再現していた。祭りは三日間続き、一日目は「壺開け」、二日目は「ワイン壺」、三日目は「壺」となっていて、ワインを飲む事が中心の祭り。最初の日の夕方までに回りの農家等から前年の秋に出来たワインが神殿に持ち込まれる。そして日が沈んだ後壺を開けて神々に最初のワインが捧げられてから初めて新しいワインを飲む。

次の「ワイン壺」の日にワイン早飲み競争が催され、二リットル壺のワインを早く飲み干す人が勝つ。奴隷も子供もその競争に参加した。飲む人は皆一人で坐り、だれにも話をせず自分のワインを飲むが、これは人殺しオレステースのもてなしを記念する為といわれている。子供は三才になった時から小さい壺のワインを飲みはじめが、この飲む祭りへの初参加は、当時のギリシャ社会では誕生や結婚同様に通過儀礼の一つであった。赤ちゃんが死んだ時お墓に小さいワイン壺を入れる習慣もあった。「壺」の日にはあらゆる穀物が蜂蜜と一緒に壺の中でゆでられ、これで三日間の飲み続けた祭りが終わる。

祭りの初めに神に新しいワインを捧げる時の捧げ方はワインを地に注ぐ「ライベーション」という神事であった。

た。行事の始まり、願ひ事、誓う時などに必ず「ライベーション」をする。アンゼステリア祭の壺開けの時にもみんながディオニシオス神の神殿でライベーションをして捧げる。ワインを地面に注ぐ事は祈りの一種、地母神を初め神達にそのワインを先に捧げる事でその助けを求める。これはギリシャの文学の中で数多く書かれた神事である。ホメロスのイリアスとオデュッセイアには英雄達が数えきれない「ライベーション」を演じている。

文学だけではなく日常生活の中でもギリシャ人は「ライベーション」をしたらしい。当時のギリシャ人の大きな楽しみはシンポジウムであった。現在シンポジウムは一種の討論会と思われているが、その語源のギリシャ語の「一緒」の意味の「シム」と「飲む」の意味の「ポテス」からなる言葉で、要するにギリシャ人にとっては「シンポジウム」が「飲む会」であった。そのシンポジウムの始まりに「ライベーション」は欠かせない行事であった。

ディオニシオス神はワインの神であるが、狂気の神でもある。その狂気とは聖なる状態で、やはり神の霊に満たされる事、極端な興奮状態、または恍惚状態であった。

たらしい。そうして、ディオニュシオス神は演劇の神でもある。ワイン、狂気と演劇の共通点は何であろうか。そのいずれも本人が自分から離れる事。ワインを飲む事によって、楽しい世界に入る事が出来、日常生活のつまらなさから逃げる事が出来る。狂気も又別世界に行つて咎めの無い自由な状態になる。演劇では俳優が本来の自分と違った役を演じ、違った世界に入り、そこに観衆を導く。

フィレンツェ市のバジエーロ美術館にミケランジェロの傑作のバックス像がある。バックス神はディオニュシオス神と同一であるが主にローマ人が呼んだ名前で、ギリシャ人は飲んでいるディオニュシオス神とそれに付き合う信奉者を「バツカンテ」と呼んだ。バックスやディオニュシオスの絵と彫刻は普通葡萄や杯を高く上げて喜んでいる神を描くが、ミケランジェロの作品は目が空ろで大分出来上がった本当に別世界にいるバックスである。左足には葡萄の房を摘まんでいるいたずらっ子のパン神がにやっと笑って寄り添っている。ワインへの讃歌よりワインは如何に恍惚の世界に導くかを、まざまざと感じさせる。

要するに、ギリシャ人は人間を単調な生活から開放するディオニュシオス神を大事にし、特に一番手近にあり、夢の世界に導いてくれるワインを愛した。

(英語学・比較神話学／文化学部教授)